

中山尚夫編

八十返舎一九集 1V

六あなご詣

古典文庫

中山尚夫編

八十返舎一九集 1V

六あなご詣

古典文庫

古典文庫第四二三冊

不許覆刻

昭和五十六年十二月二十日印刷発行

非売品

六あみだ詣

編者 中山尚夫

発行者 吉田幸一

印刷者 共立印刷株式会社

発行所

114

東京都北区西ヶ原
三ノ三四ノ一二

古典文庫

電話(九一〇)二七一七
振替口座東京九・一四五九七番

凡 例

一、本書には、十返舎一九作中から『あみだ詣』三編を全文翻刻した。底本には、初版五冊本を用い、在来の翻刻に省略された挿絵・広告文等総てを収めた。

一、翻刻にあたっては、できる限り原文に忠実であることを心がけたため

(イ) 宛字・誤字・脱字・脱文

(ロ) 仮名遣いの誤り・送り仮名の不足・清濁

(ハ) 振仮名・踊り字・割書き

(ニ) 句点・括弧

はすべて底本のままとした。ただし、会話箇所の話し手を示す場合、底本では

□ 中に示されているが、組版の都合上「」にあらためた。

一、漢字は原則として現行字体を用いた。

一、底本の丁移りは、その丁の表および裏の末尾を示すことにし、数字は底本の丁附にしたがった。

昭和五十六年四月三十日

中山 尚夫

串戲
教諭

六あみだ詣

初編

上

串戲 教諭 六あみだ詣序

夫それおもんみればあみだぶつ 惟たゞ 阿弥陀仏あみだぶつ。超世てうせの悲願ひぐわんは。偏ひとへに末法まつぽうの済度さいどにあり。故ゆゑに法末ほうまつ時ときいたり。經道滅尽きやうだうめつじんの終はりにも。残り給ふは。只ただ此本願ほんぐわんにして。衆しゆ生じやうを度し給ふ事こと。量はかりなしとや。此仏恩ぶつおんに報むくひ奉らんとて。江都かうとに六ろく箇所かしよの靈地れいちをひらき。(序一オ)あみだ仏ぶつを安やすんじ。是じゆんはいを巡めぐりするを六阿弥陀詣もうでといふ。予一とせ朋友ほうゆうにいざなはれて。此靈場れいじやう六番ろくばんをうちめぐりたるに。往來心わうらいこころにはなしもてゆく詣人けいじんのさま。彼かれと異ことに此これと同じおなからずして。聞きくに下情かじやうの限かぎりを尽つくしたれば。それに思おもひよりつゝ此卷まきに人の(序一ウ)よしなしごとをかいつけ。聊教諭いさかきやうゆのことばを滑稽こつけいにあてゝ。浅智童蒙せんちどうもうをさとし安やすからしめんと。平生卑賤へいぜいひせんの言語げんぎ応おう

答を。ありの俤にあらはす夏しかり

文化辛のとし
未の初春日

東武逸民
十返舎一九題
蔵

(序二才)

〔六阿弥陀詣人之図〕

名号称揚七日已

斯此為報广大恩

仰願本師弥陀尊

助我濟度常護念

右聖德太子法語

春の花秋の月とも仏には
愛ることゝろそなほ仏なれ

〔其二〕

ねにかへる彼岸さくらに

めてはやな

法のちかひをきくにつけても

慈鎮和尚

「引込しあんのきおひ」

「ていしゅのある後家」

「くすぐったがらぬ子」

「むかふ見ずの姫」

「世をすてぬ尼」

「ついせういふ下女」

「うちまたかうやくの手代」

（序三オ）

「げいなしのこじき」

「やきもちやきの婆
々」

「せうことなしの坊
主」

「てまんかつていふかゝ」

「おしゃべりの小娘」

「きいたふうのむすこ」

「へりくついふ隠居」

（序三ウ）

「きのきかぬおやぢ」

「足のあるいざり」

六阿弥陀請人之圖

名号 称揚 七日已 斯此爲 報廣 大恩 仰賴 本師 陀尊



助我濟

度常

護念

右
聖德太子法語

春の花

秋の月も

佛火

雲を

ふくろそ

りふ

弘

まき

世にこそぬん

つるつる女

うしろかきやうのあや



つるつるのあや

おのれのあや

其二

孫ふかへ

彼岸

さうふ

りて

ちやふ

法の

ちういと

きうふ

つけても

慈鎮和尚

おちやべうの小娘

きうふちうのむすめ

きうふちうのむすめ



全書之大意

嚮にあらはす諸人の図は今教法流布の世の中仏縁にひかれておのれくが心を
慰る人多く酒のほろ酔に顔の赤きとて丹心の信心をおこせしにもあらず化粧せ
し女のしろきとて無垢清浄の地にいたらんと願ふにもあらずたまく水溜りに踏
こみてはなむあみだぶつと称名を唱へおのれを捨ていらざる人の罪障をさんげ
しそのこゝろくにはなしつれゆくはみな得手勝手の逆罪にして悉く悪趣に
あらざるはなし仍て其人の思ふ所いふ所を形容にあらはし末にくはしくするは予
が不才をもつて人を解にあらず滑稽に比して只一興に備ふる而已
(序四了才)

武州六阿弥陀

- 第一番豊嶋村 三縁山西福寺 是より二ばん迄十五丁
 - 第二番下沼田村 甘露山応味寺 三ばん迄廿五丁
 - 第三番西ヶ原村 仏宝山無量寺 四ばん迄三十丁
 - 第四番田畑村 宝珠山与楽寺 五ばん迄廿五丁
 - 第五番下谷 延命山長福寺 六ばん迄二里
 - 第六番亀井戸 西帰山常光寺 惣道のり合て六里廿三丁
- 但し参詣の人は五番より大かた逆に札打ことあり

卷中標目

欲顏鼻の子煩惱よくづらかい こぼんのう 不器量姫の男撰ふきりようよめ おとこあらび 扶持かた棒の荷役害ふちかたぼう にやくがい
やすきをひのいくちなしいなか 田舎ものゝ生功者なまかうしや 下手医者の手前勝手へたゐしや てまへがつて
女郎買のふられ自慢かい じまん 似た山の売太平に からたいへい

鹿島太々講之記かしまだいゝかうのき

十返舎一九作

全三冊

近日出来

(序四了ウ)

〔阿弥陀仏ノ図版〕

七字亭賦

極樂も地獄のさたも金次第晦日の闇をてらす挑灯ごくらく ちごく かねしだいみそか やみ てうちん

(上巻オ)



庫藏 教論 六あみだ詣上編

東都 十返舎一九戲述

○彼岸功德經に曰。二八月七日の間無数万億のぼさつ。法を説て衆生樂をあたへ給ふなりと。其外諸經にも見へて。春秋二度の彼岸には。人間の罪障消滅の縁ふかく。仏に法施し。僧に供養するの時なりとて。六阿弥陀詣といふ事。いつの頃にやはじまり。六ヶ所の靈地に貴きも賤も。あみだの光も地獄のさたも。錢次第とてはやみちに。臍くりをねぢこみ。巾着の（上着ウ）ひもながき麗なるに。打むれつゝ一乗無外の色のよの中。とぢぶたとつれだつ破鍋あれば。餅をつく桃灯は。ねれたる祖母の腰つきを思ひやり。仏性常住の吸筒をか